

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

“テロリストに乗っ取られたJR東日本の真実”

『週刊現代 - JR東日本革マル浸透問題告発 - 』連載第3回

これが革マル派の運転士狩りだ!

『週刊現代』が、JR東日本の革マル浸透問題を連載記事で告発した。本紙は驚くべきこの事実をシリーズで紹介する。(オンライン有料購読にて入手・・・一部要約抜粋)

< 週刊現代 2006年7月31日発売号 >

革マル派を守ったJR経営陣

Y氏が、JR東労組から強制的に退職に追い込まれたとの情報を掴んだ警視庁公安部は、極秘裏にY氏に接触。彼の被害届を受け、数ヶ月に及ぶ内偵捜査を経て'02年11月、JR東労組幹部ら7人を逮捕、JR東労組本部などを家宅捜索した。しかし実は公安部は、7人の逮捕状とともに、JR東日本本社、東京支社、大宮支社の家宅捜索令状もとり、JR東日本に対し、強制捜査を行う予定だった。警察庁幹部が述懐する。

「JR東日本経営陣が、JR東労組や松崎に完全に押さえられていることは周知の事実。そんな会社が、捜査に任意で協力することなど、まったく期待できない。だから、『浦和事件』の全容を解明し、過去の事件を掘り起こすためには、JR東日本に対する強制捜査に乗り出す必要があった」しかし当初予定されていたJR東日本への強制捜査は、着手直前になって突然、任意での捜査に切り替わる。実は、この公安部の突然の方針転換の背後には警視庁、警察庁をも震撼させる一大スキャンダルが隠されているのだ。国民の警察に対する信頼を根底から揺るがせるこの不祥事については、いずれ稿を改め詳報する。

一方、JR東日本当局者が任意聴取で見せた態度は、前出の警察庁幹部の予想通り、極めて非協力的だったという。「JR東日本の佐々木信幸人事部長の非協力的な態度は、けっして彼の独断ではなく、当時の大塚陸毅むつたけ社長(63歳・現会長)や清野智せいのだとし副社長(58歳・現社長)も了承済みだった。つまり彼らは会社ぐるみで、公安部の捜査を妨害したんだ」(前出・警察庁幹部)そしてこの警察庁幹部は最後に、苦笑いを浮かべ、私にこう漏らした。「彼らは体を張って、JR東日本という『会社』を守ったつもりなんだろうが、結局は『革マル派』を守ったんだよ」

この「会社ぐるみの捜査妨害」についてJR東日本広報部に質ただしたところ、次のような「回答」が一枚、FAXで送られてきた。貴殿に回答いたしません。これが果たして、「世界最大級の公共交通機関」という責任ある企業のとるべき態度なのだろうか。

JR東労組は、自らの組合員を脱退、果ては退職にまで追いやりながら、それが刑事事件化すると「国家権力の弾圧だ」、「冤罪だ」などと主張している。一方、「被害者」の社員ではなく、「加害者」の革マル派を守るJR東日本。両者の思考回路は正常とは思えない。